

「トマス」

2021年12月06日

すると、ディディモと呼ばれるトマスが、仲間の弟子たちに、「私たちも行って、一緒に死のうではないか」と言った。(ヨハネ福音書 11 章 16 節) 「私がどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。」トマスが言った。「主よ、どこへ行かれるのか、私たちには分かりません。どうして、その道が分かるでしょう。」(ヨハネ福音書 14 章 4 節～5 節) そこで、ほかの弟子たちが、「私たちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、私は決して信じない。」(ヨハネ福音書 20 章 25 節) トマスは答えて「私の主、私の神よ」と言った。(ヨハネ福音書 20 章 28 節)

トマスは、ヨハネ福音書の三つの場面に、ドラマチックに登場している。主イエスは「私は神の子である」と言ったので、宗教者たちは「神を冒瀆する者」として捕え、殺そうとしていた。主イエスと弟子たちの一行は逃れて、身を潜めていた。そこへ、ユダヤのベタニヤに住んでいた、主イエスが愛していたラザロが病気になったことが知らされた。主イエスは「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである」と言い、留まられた。弟子たちは、ラザロの病気を癒しに行くのではないかと、内心恐れたが、留まられたので、安堵した。その二日後、主イエスは、「ユダヤに行こう」と言われたので、弟子たちは慌てて、行けば、石で打ち殺されると、懸命にユダヤ行きを押し止めようとした。しかし、主イエスは、「さあ、彼のところに行こう」と強く言われた。弟子たちは恐怖に襲われたが、トマスは弟子たちに、「私たちも行って、一緒に死のうではないか」と応じている。彼は、主イエスに殉じて、命を落とすこともいとわないほど、愛に燃えている人であった。しかし、彼は現実主義者で、死ぬしかないと悲観的、否定的に捉える人でもあった。

最後の晩餐の時、主イエスは長い告別の説教をされた。天と地を結ぶ道を開き、あなたがたを迎え、私のいる所に共にいると言われ、「私がどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている」と語られた。するとトマスが、「主よ、どこへ行かれるのか、私たちには分かりません。どうして、その道が分かるでしょう」と、理解できないと訴えている。彼は目で見、手で触れられる現実だけを受け止め、主イエスが語られる「霊」のことは理解できず、自分で確証したものしか信じない懐疑論者であった。

主イエスが復活され、弟子たちに現れた。その時、トマスはいなかった。愛する師イエスは十字架で殺され、全てが終わった。仲間で群れている必要はないと思ったからである。弟子たちはトマスを捜し出し、「私たちは主を見た」と復活の事実を告げた。トマスは、「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、私は決して信じない」と、死人の復活などあり得ないとせせら笑った。そのトマスが強引に家に連れ戻した。8日後、家にいると、復活した主イエスが来られ、釘打ちされた手と、槍で刺されたわき腹を見せて、「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」と迫られた。トマスは、「私の主、私の神よ」と言って、ひれ伏した。懐疑から、霊への目が開かれたのである。主イエスは「私を見たから信じたのか。見ないで信じる人は、幸いである」と言われた。この言葉を受けるかのように、I ペトロ 1 章 8 節に、「あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛しており、今見ていないのに信じており、言葉に尽くせないすばらしい喜びに満ちています」と書いている。トマスは、この喜ばしい復活信仰を宣教する者に変えられた。